

親鸞さまの

【本文】

信心しんじんのひとにおとらじと

疑心ぎしん自力じりきの行ぎよう者じやも

如に来よ大悲らいだいひの恩いひをしり

称しょう名み念ねん仏ぶつはげむべし

【意識】

阿弥陀様のお心を確かに聞き受けた人に劣らず、

未だ確かに聞き受けられない人（阿弥陀様より自己主張が上回っている人）も

阿弥陀様の大慈悲の御恩が既にあることを知って、

ますます感謝のお念仏をお称となえさせて頂きますように。

【私の味わい】

「父ちやんと呼べ」（藤沢周平）に、大工・徳五郎の切ない親心が描かれています。夫婦二人と職人の息子一人、順風満帆に見えた生活がある時を境に一変します。息子が賭博に入れ上げて身を持ち崩し、親に借金で迷惑を掛けた挙げ句に出奔しゅっほんしたのです。失意で肩を落とす徳五郎ですが、ある日、仕事の帰りに孤児と出会います。どんなに手を変え品を変えて話しかけても一言も発しない子でしたが、食うや食わずの境涯を哀れんで引き取ることにします。数年の歳月が流れ、徐々に打ち解けてきた頃に徳五郎は子に言います、「俺は、おまえの父だ。父と呼べ」と。このまま続くかに見えた幸せは、またもある日突然に一変します。産みの母親が、孤児の話を聞きつけて訪ねて来て、「引き取りたい」と申し出たのです。徳五郎夫婦は勝手すぎると拒否しますが、涙を流しやむを得ない事情があつたと説き伏せられ、母親が手を差し伸べると子はその手をさつと握った―そんな経緯で徳五郎は諦めざるを得ませんでした。親でありたい、その思いはいづれも成就せず、行き場のない悲哀に包まれつつ物語は幕を閉じます。

阿弥陀様と衆しゅじゆう生せい（仏様から見られている人）の関係は、人と人との間柄にたとえ

られて親と子のようなものだと言ひ習わされています。親がいる、親心がある、「あなたの親だ」という呼びかけがある。それは、親の心子知らずであつても止むことはありませぬ。一方、親を親と思えない、親心を親心と思えない、「南無阿彌陀佛」と呼びかけられても聞き受けられないならば、阿弥陀様はお悲しみのことでしょう。（悠水）